

提婆達多の今様

——『梁塵秘抄』法文歌の一性格——

植 木 朝 子

平安時代末、後白河院によって編まれた今様集『梁塵秘抄』は、ごく一部が現存するに過ぎない。その中で近代の作家たちなどに取上げられてよく知られているものは、「遊びをせんとや生まれけん 戯れせんとや生まれけん 遊ぶ子供の声聞けば 我が身さへこそゆるがるれ」「我を頼めて来ぬ男 角三つ生ひたる鬼になれ さて人に疎まれよ 霜雪霰降る水田の鳥となれ さて足冷たかれ 池の浮草となりねかし」と揺りかう揺れ揺られ歩け^①といったもので、いわゆる世俗歌謡に人々の関心は集中してきた。しかし、今見られる『梁塵秘抄』の大部分は法文歌と呼ばれる仏教歌謡に属するもので、さまざまな仏、菩薩や経典をほめたたえる内容を持っている。従って『梁塵秘抄』の理解のためには法文歌の検討が不可欠であるが、法文歌は注釈書類でその典拠を指摘された後はあまりくわしい検討がなされずにきた。今様に対応する経典の記述が指摘されれば、

それで一応の理解は可能だからであろう。また、仏教文学研究においては、たとえば高名な僧の作った和讃などと比べて、今様は一段劣るものであり、教義的に説明がつかない点もあつて、研究対象に値しないという意識も存在しないわけではない^②。しかしこれだけ多くの法文歌が作られ、人々に歌われたからには、当時の人々にとっては相應の価値があり、面白さがあつたものと考えるのが自然ではないだろうか。

本稿では、法文歌に歌われる提婆達多の姿を通して、今様の特徴、面白さがどのような点にあつたのかを考えてみたい。

提婆達多は周知のごとく、ブツダの従弟で、仏弟子となつたが、ブツダの晩年に教団の改革を唱えて容れられず、遂にその教団から離脱した。ここから破僧（教団の和合を破壊した）の極悪人とされ、ブツダに危害を加えたとか、ブツダの出家前の妃ヤショーダラーに

言いよつたとか、種々説話が生まれている。^③

この提婆達多の歌われた今様を次に掲出する。()内は『梁塵秘抄』の歌番号である。

普賢薩埵は朝日なり 釈迦は夜昼身を照らし 昔の契りしあり
ければ 達多は仏に成りにけり (三五)

釈迦の御法を受けずして 背くと人には見せしかど 千歳の勤
めを今日聞けば達多は仏の師なりける (一一〇)

達多五逆の悪人と 名には負へどもまことに 釈迦の法華經
習ひける 阿私仙人これぞかし (一一一)

達多は仏の敵なれど 仏はそれをも知らずして 慈悲の眼を開
きつつ 法の道にぞ入れたまふ (一一四)

阿私仙の洞の中 千歳の春秋仕へてぞ 会ふこと聞くこと持つ
こと 難き法をば我は聞く (一一五)

昔の仙こそあはれなれ 法華を弘めずなりにせば 人もわが身
も今までに 声だに聞かずなりなまし (一一八)

このうち、三五番歌は、『梁塵秘抄』法文歌のうち、仏歌に分類されるもので、普賢と釈迦と提婆達多を並べるが、この三者の連関がややつかみにくいと評されている。釈迦の脇侍は普賢と文殊であるが、ここでは、文殊ではなく、釈迦と対立した提婆達多をあげている。その他はすべて、法華經廿八品歌のうちの提婆品の歌である。

提婆品の内容は、

釈迦が過去の世に、王位を捨て法を求めていた時、阿私仙という仙人が来て、「私は妙法蓮華經という大乘の法を持っている。

もしも私の言い付け通りにするならば教えてやる。」と言った。王は喜んで、仙人のために果を採り、水を汲み、薪を拾い、食を設けなどして、千年ものあいだ仕えた末、やっと法を得た。

その時の仙人が今の提婆達多である。提婆達多は遠い未来に、天王如来という名の仏になるであろう、と釈迦は説いた。その

時、文殊菩薩が龍宮での教化を終えて帰還した。そして娑竭羅龍王の八歳になる女は智慧が優れ、すみやかに悟りを開いた、

と告げた。智積菩薩や舍利弗は信じがたいと言ったが、その場へ現れた龍女はたちまち変じて男子と成り、南方無垢世界に往

つて成仏し、妙法を演説した。これを見た人々はみな歓喜した。といったものだが、この品は日本では大変人気があり、天台宗の法

華八講の際にも、「法華經ヲワガ得シコトハ、薪コリ、菜ツミ、水汲ミ、仕ヘテゾ得シ」(法華讚嘆)という声明を歌いながら、堂内

を行道する。また龍女成仏を説くところから、特に女性の間で重んぜられた。『梁塵秘抄』法華經廿八品歌においても、提婆品を歌つ

た今様は十首で最多である。さて、提婆達多を歌った今様を一覧して気づく傾向は、提婆達多

の悪人としての側面を前提としながらも、「実は」前世は釈迦の師であった、あるいは未来には仏になるのだと、短い一首の中でその反転を劇的に表現しようとしていることである。一―四番歌は仏を主体として、仏が提婆達多を法の道に入れたとするが、その他は、提婆達多と釈迦が対等であるか、あるいは釈迦よりも提婆達多が上位にある形で表現される。

法華經の提婆品そのものは、提婆達多の悪行には一切ふれておらず、仏が過去を回想し、千年の間仕えたその仙人について「今の提婆達多これなり」^④と淡々と述べているだけであって、提婆達多ははじめから「善知識」と位置づけられている。また、未来に仏になる予言も、当然ながら提婆達多の悪行とは関わらずになされている。

この提婆品における提婆達多の描かれ方については、
提婆達多はブツダの近親（従弟）であっただけに教団の動揺も激しく、それだけにその反逆は強調されたが、この品では彼をブツダの友人とし特殊な立場を示している。その理由は明白ではないが、恐らくは「法華經」の教団と提婆達多の流れを汲む教団との接近を物語ると考えられる^⑤。

といった指摘があるが、「提婆品」の標題のもとに並べられた今様は、法華經提婆品のみから作られたとは言えず、先に述べたように、極悪人提婆の意外な前世あるいは未来に焦点をあて、その意外性の

面白味を強調するような表現をとっている。このように『法華經』の記述そのものとは矛盾する今様の提婆達多像について、櫻岡寛は『妙法蓮華經文句』や『法華玄義私記』などの經釈を経由した可能性を指摘している^⑥。『梁塵秘抄』今様への直接の影響については慎重な態度をとっているが、本稿では、今様の表現を検討した上で、和歌や説話をも視野に入れ、そうした經釈の流布の状況をもう少しくわしく見ていきたい。以下、先にあげた六首を主題ごとにわけて検討する。

〈提婆達多の成仏〉

普賢薩埵は朝日なり 釈迦は夜昼身を照らし 昔の契りしあり
ければ 達多は仏に成りにけり(三三五)

達多は仏の敵なれど 仏はそれをも知らずして 慈悲の眼を開
きつつ 法の道にぞ入れたまふ(一一一四)

まず、提婆達多の成仏を主題とした二首を見ていきたい。三五番歌は先にもふれたように、仏歌に分類され、普賢・釈迦・達多の三者を並べている。『梁塵秘抄』の仏歌は、釈迦如来(二二・二二三・二四・二六・二七)、阿弥陀如来(二八・二九・三〇・四三・四四)、大日如来(二五・四五)、薬師如来(三二・三三・三三・三四)、文殊菩薩(三二六)、観音菩薩(三七・三八・三九)、地藏菩薩(四〇)、竜樹菩薩(四一・四二)のごとく一つの如来、菩薩を取り上げて賛

嘆するが、三五番歌だけが三つの仏を並べており、その点でもこの歌は異彩を放っている。当該歌は表面上の意味をとるのは容易であるが、普賢・釈迦・達多三者の関係はつかみにくく、注釈書類も注をつけることを避けているものが多い。三者の連関を説明している、あるいは説明した訳をつけているのは考・評釈・新編全集・全注釈の四書であるが、普賢を譬えた朝日から、釈迦の身の光明へ、そして釈迦からその導きによって仏となった達多へとという連想関係を見ることが諸説一致している。

当該今様は、後半二句に提婆達多のことを歌っており、一首の重心は達多成仏に置かれることになる。それは当然釈迦との関係から導かれているのだが、「普賢薩埵は」と歌い出した割に、普賢より達多へと重心が移っていく形をとっている。

一四番歌は、達多をはつきり「仏の敵」としており、提婆品にはない記述を含む。最も問題になるのが、第二句の「仏はそれをも知らずして」であり、文字通り「知らないで」と訳すと矛盾が生じるため、諸説は、提婆達多の悪行を問題にせず、それにこだわらないで、と捉えている。

確かに「知る」には、次のような例があり、「考慮に入れる。頓着する。気にする」と解釈できる。この場合、否定の語を伴って用いられることが多い。

世の譏り人のうらみをも知らず、心寄せたてまつるを

〔源氏物語〕若菜下^⑧

それをば知らず（＝投げ飛ばされた相撲にはかまわず）、成村があるかたざまへ、走か、りければ、成村、目をかけて逃けり。

〔宇治拾遺物語〕卷二ノ十三^⑨

『源氏物語』の当該箇所は光源氏のことばで、世間の非難や人の恨みも気にせず秋好中宮の後押しをしていることを言う。『宇治拾遺物語』の例は、大学寮の学士らと相撲人達が争いになった時、ある一人の強力の学士が多くの相撲を投げ飛ばし、さらに高名な相撲人であった成村に猛然と向かってくる場面である。

さて、当該今様の第二句について、櫻岡寛は次のように述べる。

第二句の仏が提婆達多を敵と知らなかった、という句は、典拠未詳である上に、正統的な経釈を離れた想像ないしは創作によるものと思われる。その理由は、仏に害を与えた提婆を仏が敵と知らないことはありえない。^{注6}これは小乗経からはこの句は導き出されないことを示す。又、『法華経』以外の大乗經典でも仏に法身を認める経からも導き出されない。法身は遍一切処といわれる真理の側面とともに、仏が法身に在って度すべき機を照らす等と言われ、法身仏は一切を遍く知るからである。

（注6）古典大系本願注は「知らずして」を「無視して」と解す。しか

し、この訳でもこの歌の矛盾は解けない。この訳語自体がこの一首の矛盾を保存することになる。その理由は、釈迦牟尼が提婆の悪行を無視して真の悟りに導いたと述べる経典は存在するのかということが第一。筆者は未見。小乗経では提婆達多は地獄に墮ちるが、来世において成仏するのかどうかは全く不明であり、小乗の仏伝との矛盾は変わらない。提婆達多が成仏すると明記するのは本文中の『弘決』の引文が示すように「法華経」のみであるが、その中で仏は提婆達多の前身を語り、法華会当時の行悪をも語る。提婆授記は悪行を考慮せずに行われたものではなく、『法華経』の衆生皆成仏の思想によるものである。尤も、一首の作者が「悪行の提婆達多に仏が授記した」事実のみによって、自分の想像を加えて「仏はそれをも知らずして」と解釈したと考えることはできるだろう。この場合は、説法などによらなくとも経文の断片的な知識さえあれば可能な詠ということになる。ただし、このような考え方は仏を世俗の人間の水準に引き下げるものである。

ここは、注6後半で述べられているように、「悪行の提婆達多に仏が授記した」事実から、今様作者が、「仏はそれをも知らずして」と解釈し、仏の慈悲の広大さへと結びつけていったと考えてよいと思われる。櫻岡論は「このような考え方は仏を世俗の人間の水準に引き下げる」として、暗に、経文に典拠を持たない今様表現を批判的に捉えているが、これはむしろ逆で、仏を世俗の人間と近しいところに置き、仏世界に世俗の人間が一体化していこうとする姿勢こそが、今様享受者の願望を反映した作者の工夫であったのではないだろうか。

「慈悲の眼を開きつつ」は、次にあげたように仏や菩薩が衆生をあわれみ、いつくしむ心をもって見守るという解釈で、諸説はほぼ一致している。評釈は「大慈大悲の眼で見てやつての意。大きなあはれみの心で接すること。もう一解は「提婆達多に慈悲心を具足させて」とも考へられる」と二説を併記するが、『梁塵秘抄』二二三番歌には

慈悲の眼はあざやかに 蓮の如くぞ開けたる 智恵の光は夜々
に 朝日の如く明らかに (二二三)

と見え、仏の慈悲の目を蓮にたとえているので、「提婆達多に慈悲心を具足させて」の解はとらず、仏の側の慈悲と解釈したい。

「法の道にぞ入れたまふ」については、釈迦が提婆達多の成仏を保証したことを指すと見ることで諸説一致している。櫻岡論は、

前引の経文で明らかのように、『法華経』は、仏が提婆に別記を与えたことを語るのみであった。それに対して、『法華論』は次のような釈を加えている。

如来与彼提婆達多授別記者、示現如来無怨悪故。

「別記」は、一人だけ別に名ざしして授記することで、これは経文の注解である。次に、如来には怨悪がないことを示現するものだ、というのは、単なる注解以上のものである。これは経文に新しい意味を加えるもの、又は、隠されている意味を明

らかにする等という点で「菩薩の法施」などと呼ばれる。ただし、この文は、そのまま理解するなら、第一一四歌の参考とはならない。「示現」は化儀の一部であり、仏は一切を知った上で「如来無怨悪」を示現したのである。しかし、この記述の中の「如来無怨悪」のみに焦点をあてて提婆の授記を理解した場合、「慈悲深い釈迦牟尼は提婆達多にも記を授けた」または、「如来は怨悪を持たぬが故に提婆達多に記を授けた」等々の解が可能になる。

と述べて、仏の慈悲を強調する見方が『法華論』の「如来無怨悪」といった表現から導かれている可能性を指摘している。『梁塵秘抄』には、他にも

積もれる罪は夜の霜 慈悲の光にたぐへずは 行者の心を鎮め

つつ 実相真相を思ふべし（五六）

といったような今様があり、衆生の罪を霜にたとえ、それを溶かす朝日のような仏の慈悲に焦点を当てている。櫻岡論を否定するものではないが、特定の典拠を持たずとも、仏の广大無辺な慈悲を讃えるという心性は広く共有されていたものと思われる。

〈悪行（迹）―釈迦の師（本）〉

釈迦の御法を受けずして 背くと人には見せしかど 千歳の勤
めを今日聞けば達多は仏の師なりける（一一〇）

達多五逆の悪人と 名には負へどもまことには 釈迦の法華經
習ひける 阿私仙人これぞかし（一一一）

この二首は、提婆達多の悪行を歌いながら、実は釈迦の師であったのだということの方に重点を置いているもので、法華經提婆品にはない、極悪人提婆の面を合わせ表現することにより、一首に劇的な反転をもたらしている。一一四番歌も「仏の敵」が成仏したという表現を持ち、一首の中に反転があるという点では一一〇番歌・一一一番歌と共通する。先にふれたように、櫻岡氏はこうした考え方の典拠として、『妙法蓮華經文句』や『法華玄義私記』などをあげる。

一一〇番歌で注目されるのは「今日」という表現で、「千歳の勤め」すなわち釈迦が前生において千年の間阿私仙（実は提婆達多）に給仕したことを今日聞いたというのは、集成が注をつけるように「釈迦の法華經説法場に居合わせた者の身になっての表現」であるが、実際にその物語を聞いている人々の「今日」とも重なり、過去のインドの時間と現実の時間とが重なって臨場感あふれる表現となっているといえよう。

著名な例であるが、後白河院の今様生活を回想した自伝『梁塵秘抄口伝集』巻十には、「四大声聞いかばかり 喜び身よりも余らむ われらは後世の仏ぞと 確かに聞きつる今日なれば（八五）」という今様を歌う場面が二度出てくる。そもそもこの今様は、釈迦

の四人の弟子、慧命須菩提・摩訶迦旃延・摩訶迦葉・摩訶目犍連の四大声聞が釈迦から、成仏の保証を聞いた「今日」どれほど喜びを感じたことだろう、という内容であるが、『口伝集』では、後白河院から「恋せば」という今様の大曲を習った延寿が、院からみことであると褒められて、即座にこの今様を歌っている。すなわち、院から今様の曲を体得したことを認められた延寿が、自らを釈迦から成仏の保証を得た声聞になぞらえており、今様詞章の「今日」はまさしくこの今様を歌っている今この時と重なっている。もう一つの場面では、厳島に参詣した院が巫女から神の託宣として「我に申すことは、かならず叶ふべし。後世のことを申すこそあはれにおぼしめせ。今様を聞かばや」と言われて、この今様を歌う。ここでも「今日」は釈迦の説法の場合、厳島で神の託宣を得た今日に、巧みに移されている。一一〇番歌の「今日」もこうした効果をもつ言葉と考えられよう。

〈仏の苦勞〉

阿私仙の洞の中 千歳の春秋仕へてぞ 会ふこと聞くこと持つ
こと 難き法をば我は聞く(一一五)

これまでに見てきた今様は提婆達多に焦点が当てられていたが、一一五番歌では提婆達多は前世の「阿私仙」として名が見えるのみで、一首の中心は釈迦の苦勞とその報いであって、千年に及ぶ給仕

の果てに法華経を聞くことができたという喜びが歌われている。

この一首で注意されるのは「洞」という言葉である。これは法華経に見えないので、注釈書類でも問題にされ、「仙人の居所を「仙洞」というので、その連想か(新編全集)」という解釈ではほぼ一致していた。櫻岡論は、これに疑問を呈し、

初句の「洞の中」は経にみえない。これは、阿私仙の「仙」を中国古来の仙人と同一視して作者自身が当時普通に用いられていた「仙洞」の語をあてたのではあるまい。既に源信『妙行心要集』下の末に「凡有心者、即法身故。是以、阿私仙洞身為床座。千歳給仕得聞法華」云々の句がみえる。

と指摘する。さらに、今様に近い時代の唱導資料を探してみると、安居院澄憲の草した『花文集』に、法華経を教えようという阿私仙に、国王が喜んでついていく場面で、「即從仙人、入幽洞給」と見え、さらに、一通りの話を記した後、「昔国王者誰人、今日大恩教主是也。往仙人者アニ異人、今提婆達多ソカシ。所以、昔在仙洞拾千歳菓、今住靈山開一実蓮^①。」と記す。澄憲は説法の名手・唱導の祖として名高く、その説教の流れは安居院流と称されて、子の聖覚から孫の隆承へと継承された。澄憲は後白河院の今様の師・乙前の一周忌に追善の表白を作ってもいる。

この澄憲及びその子聖覚の作とされる『鳳光抄』にも、提婆達多

品の内容を述べる中に「時有一仙人自深山洞中来携杖」¹²⁾と見える。この直後に脱落があるが、提婆達多品に登場するこの仙人が阿私仙であることは明らかであろう。

さらに、平安時代末から鎌倉時代初めに成立した、天台系の唱導談義の草稿と思われる『草案集』において、提婆達多品の大要を述べる中に、「タチマチ仙人ト只二人カイツレテ、即二入仙洞給ヒ又」¹³⁾と見える。『草案集』には「澄憲法印言説ナリ」という注記のなされている部分もあり、安居院流の教学と密接な関係があると考えられているが、その中に阿私仙人の住居として「洞」の語が使われていることに注意しておきたい。

「洞」というのは特に珍しい語でもないように思われるが、文学作品に頻出する言葉とも言いにくい。中世までの和歌の例では次のようなものが見出だされる程度である。

かざしのうた

ちよを経むほらのうちなる鶴さへも君がかざしをつかふべきか

な
〔能宣集〕¹⁴⁾

居処十首

やまぶしのはやはのほらにとしふりて苔にかさぬるすみぞめの

袖

夜尋僧

ふけぬれば露とともにや宿らましいはやのほらの苔のむしろに

(以上『秋篠月清集』)

雑十首

奥山のいはほのほらに住むとても哀れあなうと世をや嘆かん

(『壬二集』)

提婆品

拾薪設食

☆おほづかなみねの薪をひろふまに苔のほらにや煙立つらん

これもそのむかしの事なり、身心無倦などとかれた

るは、しばしもたゆまず心ざしをはこばせ給ひける

にこそ

(以上『法門百首』)

『能宣集』の例では、神仙世界のイメージで鶴の住む洞が詠まれているが、その他は修行者の住処としての洞が詠まれる。注目されるのは☆を付した『法門百首』の例で、まさに提婆品の和歌として「苔のほら」という表現が使われている。『法門百首』は唯心房寂然(一一二〇頃―一一八二頃)の百首歌であるが、家集『唯心房集』に五十首の今様が含まれるなど、今様と関わりの深い人物である寂然が、詠歌の中で阿私仙の住処として「洞」の語を使っているのは興味深く思われる。

説話の中では、洞は修行者の住処として出てくることが多く、軍記物語では、次のごとく、敵を待ち受ける場所として散見する。

あそこの峰、ここの洞より、赤旗ども手々にさしあげて寄せければ……
〔平家物語〕卷六・横田河原合戦¹⁶

ある谷の洞に風少しのどけきところあり。「敵河を越えれば、下り矢先に一矢射て……」

〔義経記〕卷五・吉野法師判官を追ひかけ奉る事¹⁷
あるいは、『枕草子』に「名おそろしき物 青淵。谷の洞。……」

〔二四六段¹⁸〕とあり、『今昔物語集』に毒蛇の住処としての洞が現れたり（巻四第二十七話・卷十三第十七話など）、御伽草子「酒呑童子」に鬼の住処を「ものうき洞¹⁹」と表現したりするように、人里離れた恐ろしげな場所として描かれることもある。だからこそ修行の地ともなるのだが、興味深いのは、次に掲げる『今鏡』の記述である。

又帝の位を捨てて、弟に譲り給ひて、西山のほらに住み給ふなども、仏の道に入り給ひ、深き御法にもかよふ御有様なり。提婆品に説き給へる、昔の帝の御有様も思ひ出でられさせ給ふ。

〔今鏡〕うちぎき第十・作り物語の行方²⁰
これは、『源氏物語』綺語説に対する姫の弁護の言葉であるが、『源氏物語』には仏道帰依を勧める面がある、として例をあげた中に、

提婆達多の今様

朱雀院の様子を述べて提婆品を引き合いに出している。「昔の帝」は、釈迦の前世を指す。『源氏物語』では朱雀院の住まいについて「ほら」という言葉は出てこない。該当箇所表現は、

西山なる御寺造りはてて、移ろはせ給はん程の御いそぎをせさせ給に
（若菜・上）²¹

というものである。朱雀院が「洞」に住むはずはないが、『今鏡』は提婆品との対応上、「洞」の語を使ったものと思われる。そして法華経そのものには「洞」の語は出てこないもので、これまで述べてきた唱導や釈教歌を通して、提婆品と洞の語が自然に結びついていたことを、『今鏡』の当該記事は示していると言えるのではないか。

『今昔物語集』には、仙人の住む場所として洞が散見する。巻十一第三話では優婆塞が「五色ノ雲ニ乗テ仙人ノ洞ニ通フ」と見え、巻十三第二話では「巖ノ洞」に住む仙人が昼夜法華経を誦誦している。また巻十三第四話の法空は「人跡絶タル山ノ中ニ古キ仙ノ洞有り」と聞いて、そこに入り修行に励む。

用例の全体数は少ないが、このような一般的な「洞」のイメージが提婆達多の物語に重ねられていくことが、『法門百首』や『今鏡』の例から跡づけられ、こうした流れの中に一一五番今様も位置づけられよう。

この「洞」についても一つ、視野に入れておいてよいのは、法華経美術の表現と思われる。法華経の内容を絵画化した法華経變相図の場面と、和歌や今様に歌われる場面が共通することはすでに指摘がある。²⁴ 提婆品については、釈迦の阿私仙人給仕と龍女成仏の場面が、繰り返し取り上げられてきたが、この阿私仙人は洞の中に座し、手に法華経とおぼしき紙片あるいは巻物を持っている姿で描かれることが多い。²⁵ 阿私仙人は山中にいますので、洞に住んでいるのは当然予想されることであり、当然すぎるためかあまり注意されてこなかったが、このような具体的視覚的事例は、洞の語が今様の中に歌い込まれる背景として視野にいれておいてよいものと考えられる。洞についての考察が長くなったが、次に一一五番歌の後半の表現を見ていきたい。

「会ふこと聞くこと持つこと難き法」については、その繰り返しに注目して、以下のような指摘がなされている。

「こと」の尾韻の繰返しは、洞の生活の楽しさを言つて居るやうである。
(評釈)

釈迦自身の視点に立って、法華経を習い得た喜びをリズムカラルに歌っている。
(集成)

一二二と同趣の、釈迦の独白風の歌謡。第三句の「……こと」の反復で効果を強めた。
(新全集)

ただし、評釈の「洞の生活の楽しさ」というのは、やや無理があり、過去世の釈迦は、仙人に仕える、むしろ苦しい生活に耐えてやつと、法華経を得たのであり、この三つの「こと」は「難き法」にかかつていくので、いかに得ることが難しいか、という法華経の得難さの強調と考えた方がよいのではないだろうか。法華経の得難さを詠んだ今様に、

譲りし菩薩の頂を かへすがへすぞかい撫でし 得がたき御法の末の世の うしろめたなく覚ゆれば (一四七)
があり、釈教歌に次のようなものがある。

囑累品

いただきを返す返すぞかきなづる得がたき法のうしろめたさよ

(二公任集)

功德品

たもちがたきのりを書き読むむくいには水すみ清き鏡なりける

(一赤染衛門集)

提婆品

採薪及菓麻、随時恭敬与

★新とり嶺の菓をもとめてぞえがたき法は聞きはじめける

(一長秋詠藻)

☆あふもかたしうくるもかたしうれしくも人に生れて法をさくら

む

〔拾玉集〕

右大臣家の百首、釈教

あひがたきのりにうききを得たる身は苦しき海になかしづま
ん
〔頼輔集〕

和歌と今様では音数の自由度が全く異なるので、一概に比較できないが、今様の反復は耳に残るという点で謡物としての性格がよく出ていると思われる。和歌の中では☆を付した『拾玉集』が「あふもかたしうくるもかたし」と繰り返し返しの表現を用いており、注意される。慈円は今様を作っていることが知られ、あるいは今様の表現に触発されたものとも考えられよう。この「会ふこと聞くこと持つこと難き法」を得た「我」はもちろん釈迦自身のこと、この一首は釈迦の立場に立つており、今様を歌う人々自身は釈迦となつてその前世の物語を生きたことになる。一一〇番歌の「今日聞けば」と同様の効果がある。釈教歌の中にも釈迦の立場に立った詠歌があり、著名なのは、冒頭にもふれた法華讃嘆の歌であろう。『拾遺和歌集』巻二十に、「大僧正行基、よみたまひける」の詞書で収録されている「法華経をわが得し事はたき木こり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」である。

釈迦の立場に立った和歌で、今様と近い時代のものとしては、倭成に、★を付したものがあつた。なお、釈迦の立場に立った今様とし

て、『梁塵秘抄』にはもう一首

釈迦の誓ひは頼もしき われらが滅後に法華経を 常に持たむ
人はみな 仏に成ること難からず (一一四五)

があり、この「われら」は、「われ」と同じで釈迦の自称である。こうした今様を歌うという行為によつて、人々は自らを釈迦の物語に組み込むことになる。歌を歌う行為は、たとえば和歌を詠み、管弦を奏するといった行為よりいっそうダイレクトに神仏との交感を可能にすると考えられているが、こうした詞章によつて神仏に成りかわる奇跡までもが可能であるかのように人々には感じられたのではないだろうか。さすがに、釈迦の自称としての「われ」は現存する『梁塵秘抄』中、一一五番歌と一四五番歌に見られるのみである。ただし、提婆品の今様に

水をたたきて水掬ひ 霜をはらひて薪とり 千歳の春秋をすぐ
してぞ 一乗妙法聞きそめし (一一二二)

とあつて、これには提婆達多が出てこない。冒頭には掲出しなかつたが、一一五番歌と同じく、釈迦自身の告白の体をとっている。「われ」の語は含まれないが、この今様も釈迦の立場に立ったもので、この釈迦の苦勞を自分の身に重ねようとする今様の志向がみとれよう。
(以下次号)

注

- ① 新編日本古典文学全集「神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集」(小学館 二〇〇〇年)による。『梁塵秘抄』今様の引用は、以下、同書による。
- ② 古くは澄憲が、後白河院の今様の師・乙前の一周忌追善表白において、今様を「雑穢之曲調」としており、また、多屋頼俊は和讃と今様の先後關係を説く際、「(和讃は) 仏を礼讃し、教法を宣布し、救済を願ふものであつて、其の内容は固より經典に根拠を有し、その製作態度は最も嚴肅であつて、遊女等の間に行はれて居る歌詞を取り入れる事は、如何に方便とは云へ、有り難い事であると思ふ」(和讃史概説)法蔵館 一九三三年」と述べる。
- ③ 岩本裕『仏教説話の源流と展開 仏教説話研究 第二卷』仏教説話の展開 第二章 デーヴァタッタの反逆(開明書院 一九七八年)による。
- ④ 岩波文庫『法華経 中』(一九六四年)による。
- ⑤ 岩本裕『日本仏教語辞典』提婆品の項。注③論文に詳述される。
- ⑥ 櫻岡寛『古典文学における天台法門の影響研究』第一部第二章第三項(岩波出版サービスタワー 二〇〇一年)。以下、櫻岡論として引用するのはすべて本論である。
- ⑦ 本稿で用いる『梁塵秘抄』注釈書の略号は以下の通り。
考Ⅱ『梁塵秘抄考』小西甚一 三省堂 一九四一年
評釈Ⅱ『梁塵秘抄評釈』荒井源司 甲陽書房 一九五九年
大系Ⅱ『日本古典文学大系』和漢朗詠集 梁塵秘抄 志田延義校注 岩波書店 一九六五年
集成Ⅱ『新潮日本古典集成』梁塵秘抄 榎克朗校注 新潮社 一九七九年
新大系Ⅱ『新日本古典文学大系』梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡 武石
- 彰夫校注 岩波書店 一九九三年
新編全集Ⅱ『新編日本古典文学全集』神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集 小学館 二〇〇〇年
全注釈Ⅱ『梁塵秘抄全注釈』上田設夫 新典社 二〇〇一年
- ⑧ 新日本古典文学大系『源氏物語 三』(岩波書店 一九九五年)による。
- ⑨ 新日本古典文学大系『宇治拾遺物語 古本説話集』(岩波書店 一九〇〇年)による。
- ⑩ 注①書による。
- ⑪ 真福寺善本叢刊二『法華経古注釈集』(臨川書店 二〇〇〇年)による。『花文集』の引用は、以下、同書による。
- ⑫ 永井義憲・清水宥聖『安居院唱導集 上卷』(角川書店 一九七二年)による。
- ⑬ 橋本章彦・菊池政和「曼殊院蔵『草案集』」第五卷(十二丁裏～十六丁表) 翻刻と註釈(『唱導文学研究 第二集』三弥井書店 一九九九年)による。『草案集』の引用は以下、同書による。
- ⑭ 貴重古典籍刊行会『草案集』(一九五八年) 解説による。
- ⑮ 新編国歌大観により、一部表記を改めた。和歌の引用は以下同じ。
- ⑯ 新編日本古典文学全集『平家物語①』(小学館 一九九四年)による。
- ⑰ 日本古典文学大系『義経記』(岩波書店 一九五九年)による。
- ⑱ 新日本古典文学大系『枕草子』(岩波書店 一九九一年)による。
- ⑲ 日本古典文学大系『御伽草子』(岩波書店 一九五八年)による。
- ⑳ 海野泰男『今鏡全釈』(上下合本復刻版 パルтус社 一九九六年)による。
- ㉑ 注⑧書による。
- ㉒ 仙人の住処としての洞は漢詩にも見え、例えば『和漢朗詠集』仙家所

取、温庭筠の詩の一節に「山底採薇雲不厭 洞中栽樹鶴先知（山の底に薇を採れば雲厭はず 洞の中に樹を栽うれば鶴先づ知る）」とある（引用は、新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』（小学館 一九九九年）による）。

②③ 以上、『今昔物語集』の引用は、新日本古典文学大系『今昔物語集 三』（岩波書店 一九九三年）による。

②④ 宮次男「法華經の絵と今様の歌」（『佛教藝術』一三二号 一九八〇年）による。

②⑤ 重要文化財・紙本墨書法華經卷五見返絵（個人蔵・伝来不詳 平安時代）、重要文化財・紺紙金字法華經卷五見返絵（個人蔵・平泉中尊寺伝来 平安時代）、国宝・弘功德時絵経箱蓋側面（藤田美術館蔵 平安時代）、国宝・紺紙金字法華經卷五見返絵（厳島神社 平安時代）など。

図版は倉田文作・田村芳朗監修『法華經の美術』（佼成出版社 一九九一年）、『厳島神社国宝展』（奈良国立博物館 二〇〇五年）で確認した。

②⑥ 『拾玉集』には花・郭公・月・雪と題された七（八）音・五音の四句からなる今様が載る。また五巻本のみに見える一首に、「谷の小川も通ひ路も 雪降りつみて 路もなし もりこし水の音もせず 氷をたたきて水をくみ 霜をはらひて薪採り 千とせの春秋すぎしてぞ 一乗妙法聞き初めし」とあり、「氷をたたきて」以下は、本稿で問題としている提婆品の今様一二番歌とほぼ一致している。